細江カトリック教会だより

春号

〒750-0016　下関市細江町 1-9-15　083-222-2294　083-222-0970
ホームページ　http://hosoechurch.sakura

別れと出会いのとき

去る３月９日、第７２回下関天使幼稚園の卒園式が生涯学習センター「風のホール」で開催された。３，４年前、泣き虫だった園児が、下の学年に入ったお友達を、実の兄弟姉妹のようにお世話する姿を見て、感動を覚えたものだが、一人一人の卒園児の親御さんにとって、子どもたちの目を見張るような成長ぶりは、どれほど大きな感動を与えただろうか。流されたたくさんの涙は、ただ、子どもたちの成長に対してではなく、子どもたちが過ごした年月、また、そこで出会った仲間、そして、お世話になった先生たちとの別れを惜しむ涙だったに違いない。

折しも、教会は、復活祭を迎えるための準備の期間、四旬節を過ごしている。四旬節は、一年で最も大事で、信仰の核心である主イエスの復活をふさわしく迎えるための準備の時である。復活祭に洗礼を受ける方々とともに、これまでの生き方、考え方、身の振り方に別れを告げ、新しい人としてキリストを着、キリストのように生きる決意をする時である。そこには、当然、今までの自分との訣別を痛む心もあろう。復活祭の前に置かれた受難の週は、単なる時系列上の出来事を記念する時ではない。人々が経験する苦しみ、痛み、悲しみのすべてを味わいつくされた主の苦しみに与りながら、自分自身も、そうした自分を縛っている、様々な手かせ・足枷から自由になり、より広い心で主の命に生きる転換の時である。

ルカは、「苦しみを受けて栄光に入る」という表現で、その神秘を表現する。しかし、これは誤解を生みやすい表現である。苦しみの後に、あたかも報いのように栄光が与えられるのではない。むしろ、苦しみと栄光は不可分な関係、表裏の関係にあることを悟らなければならない。苦しみから逃げず、そこに、とことん身を置いたとき、上から、神から、救いが、光が、栄光が予期せずして訪れる、そうした神秘が「過ぎ越し」の意味ではないだろうか。そのような経験を通して、人間は、単に、過去の自分と訣別するのではなく、むしろ、それを通して、あらたな次元へと導かれる、あらたな出会いへと導かれるのである。あらたな自分だけでなく新たなかたちでの人々との出会い、絆、つながりが生まれる。それこそが教会である。

子どもたちが、懐かしい学び舎を去り、親しくなった仲間と別れ、それぞれの道を歩き始めるのは、一面で寂しいことだが、それによって、人生のあらたな段階に進み、より多くの仲間との絆を結び、大きく成長してゆくように、わたしたち信仰者も、過ぎ越しの経験を通して、より新しい自分として、より豊かで深みのある教会を生み出す力となれるよう祈りたいものだ。

作道 宗三 神父

細江教会聖堂の思い出　Ⅵ

細江教会聖堂の思いで

彦島教会　福永 孝章

私が初めて細江教会に行ったのは、天使幼稚園の園児としてでした。母の話では、面接でいったん落ちたのですが、家が天使幼稚園に近かったために、ご近所さんを大切にしたいということで、入園させていただいたとのことでした。昭和 28 年だったと思いますが、聖堂と幼稚園が一体で、綺麗な絵がかざられているすてきな空間で幼年期を過ごさせていただきました。卒園後しばらくは教会とは関係がなかったのですが、妹の陽子が天使幼稚園に通っているときに、母が勉強をはじめ、洗礼を受けることになり、昭和 32 年に母と私と妹と 3 人で洗礼を受けました。天使幼稚園がなければ信徒になることもなかったかもしれません。その時は幼稚園の建物とは別に聖堂ができていましたが、2 階ができてなく、昔の聖堂の作りで、正面の高いところに祭壇があり、司祭も信徒も祭壇に向かって祈っていました。ご聖体を頂くときは、階段を上がって祭壇の前でひざまずいて拝領していました。写真①は初聖体のときの写真です。　小学生から高校生まで、侍者を務めたり、中高校生会で活動していたので、この時代が最も思い出に残っています。

昭和 46 年に大学を卒業して帰って来た時には、2 階建ての聖堂ができており、第 2 バチカン公会議の新しい考え方が反映された、半円形に座る聖堂になっていました。

写真①

司祭館は、最初からあったようですが、前庭があり、アーチ形の廊下もあって、おしゃれなつくりになっていました。写真②も初聖体の写真ですが、後ろに立っているのは、右から中山神父、丸川神父、武島神父、田尾先生、中村先生だと思います。

写真②

起工式　安全祈願　2/20（火）

＊建設の安全を祈願。建設関係の方々とともに祈る。

＊神父さまが土地の祝別を！

教会建替え状況の報告

整地から縄張り、位置確認･･･

＊幼稚園園庭に建設事務所が設営された

＊元駐車場が掘り起こされて杭打ち･･

＊「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」･･･の箇所を思う

＊こんなにも深く掘り下げていく

誕生日を迎えて

2月26日誕生

菊野　清一

先日ＮＨＫで「こころの時代･かくも長き道」を見た。３６歳でノートルダム清心女子大学学長に就任したシスター渡辺和子と彼女の父を殺した将校の弟の「こころ」を辿っていた。

１９３６年、二二六事件。未明、大雪の中、約１５００名の兵を率いて、「天皇親政」「昭和維新」の断行を迫る陸軍皇道派青年将校２０名が永田町を占拠、斉藤内大臣・高橋大蔵大臣・渡辺教育総監（和子の父）を殺害した。９歳の和子を気遣って母の所へ逃げろと促す瀕死の父の最後をシスターは見届けた。「銃を手にしていたのに誰も殺さなかったのは、とても立派な最期だった」と語っている。

大学の正面玄関に学生へのはなむけの言葉が掲げてある。

天のお父様

どんな不幸の息を吸っても

吐く息は、感謝でありますように

死刑になった兄への葛藤と世間の目を逃れながら、あの事件は何だったのかを追い続けた弟は、兄が殺した人の娘、シスターとの交流によって解き放たれた。以後総監のお墓参りをつづけている。

２００７年９月三教会の「命といのちの架け橋の会」主催でシスターの講演会が梅光女学院高等学校で開かれた。

「両手でいただく・ていねいにいきる」

約８００名が聴き入った。

今年の２月２６日で８５歳。２２６を車の番号にもしている。吐く息が感謝でありたい。両手で愛をいただき、これからもていねいに生きていきたいと願っている。

四旬節黙想会　3/10（日）

～復活について考えましょう～

講話は山口島根地区長　山口道晴神父

「愛する、祈る、人に優しくする」
練習をしていますか。

「人は必ず死に向かっている。身近なところにある生きる意味を、イエスに結びつける四旬節です。神の方向に向いているのか。
信者としてどのように生きているのか。
いろんな理由をつけてこの四旬節を見えないままの信仰生活になっていないか。
あなたは形だけの信者ではなかったか。
どのような犠牲を神さまに捧げたか、何をしたかではなく、何を神さまのためにしたのか。」一つひとつの神父様の呼びかけは、私の心にグサッと突き刺さる。
自分のための四旬節となってなかったかと問われると、「違う違う、祈っているし、自分なりに神さまの愛に応えられるよう、見えないところで奉仕をしているし、できるだけ人に優しく接している」と言い訳をするが、神さまは全部お見通しです。十字架のイエスさまは「ダメだよ、わたしのこの姿を見て！」と囁く声を感じる。

神さま、こんな信仰の薄くて心貧しい、何もかも足りないばかりの私ですが、心を神さまに向かわせてください！この四旬節、聖霊の働きによって、神さまによって導いていただきたい。心を込めた行いができるよう四旬節に限らず毎日の生活の中でも・・・。

『祈りは魂の呼吸、
神さまの方向に、
神さまと共に生きる』

K．K

異動の挨拶

イエズス会神学生　小丹枝 昌哉

２０２３年の３月末から下関の細江教会に滞在しておりましたが、この度、イエズス会の管区長からのご指示がありまして、広島の長束修道院に異動することになりました。

細江教会での滞在期間は１年間という、とても短い期間ではありましたが、細江・彦島・長府教会の皆様との関わりを通して、多くのことを学ばせていただくことができました。特に古い歴史のある細江教会の建て替えという大きな事業の始まりに携わることができたことには、私自身、心から感謝を致しております。できることなら、新聖堂の完成まで細江教会に滞在したかったのですが、残念ながら新聖堂の完成を見ることなく異動することになってしまいました。コロナの心配もまだ残っていた時期であったことと、旧聖堂の取り壊しに伴う引っ越し作業などで忙しかったこともあり、皆様と教会の行事を通して関わることが少なかったのですが、ミサなどを通して下関の信者の皆様の優しさに触れることができて、私自身、この１年間はとても良い思い出になりました。下関市役所前でおこなった３教会合同のバザーでは、かき氷づくりに共に奉仕することができましたし、彦島教会での教会学校のキャンプでは、子どもたちの茶道体験でも奉仕することができました。また長府教会での幼稚園との合同のイベントでは、ロクスひよりやまのキッチンカーをお借りして、子どもたちにカレーライスの提供のお手伝いをすることもできました。新聖堂が完成した折には、下関の教会の新しい歴史を担う新聖堂を見に来たいと思っております。またお会いできる日を楽しみにしております。短い期間ではありましたが、お世話になりました。